

をそへなければならぬといふ身の上にごさいます、併しその事
 情といふのは斯様々々にて、その憎むべき龜澤兵庫之助といふ
 者が、此度その者を唐丸籠にのせ、江州彦根へつれ歸り、井伊掃
 部頭御前のお許しをうけ、城下にて花々しく敵討をいたさうと
 いふの了簡にて江州へ立歸る途中、圖らずも今宵當驛に一泊い
 たしたやうな仕儀にごさいます、然るに貴方様の御師匠十兵衛
 三殿といへる先生は、既に此世をば去られたと仰せに相成りま
 すか、それに就て一寸とお話をいたしたい、この印籠といふの
 は斯様々々の次第にて、此度仙臺において一命をすてましたる
 お政、即ちこの平太郎のためには現在の母親が先年十兵衛先生
 から戴きました品でございます、何うか御覽下さるやう」とい
 つて其所へ差出だしました、荒木又右衛門はこれを取つてみま
 すると、「成程小さい文字ですが、金字にて柳生十兵衛三殿とい

ふ名前がほりつけてありますから、思はずこれを押戴きまして
 又右ハ、ッ、これは冥途黄泉に在します御師匠に廻りあふ
 た心持、さてはお師匠様が御存命中日夜お待ちあそばしたこの
 印籠が、彦根の藩蔵野の妻お政といへる方の手に納まりあつた
 か、ア、この印籠をみるにつけ、お師匠様の御高恩が深く思ひ
 だされる」と眼の前に大山が崩れ來るとも、ビクともせぬ豪傑
 荒木又右衛門もホロリと涙を溢しまして又右「この一品は亡きお
 師匠様が平太郎殿の母人の手に渡され、それがいま平太郎殿の
 手に渡つてある、拙者はまたその十兵衛先生の門人としてみれ
 ば、拙者は平太郎殿とはまた何か因縁のあるべきものと思はれ
 る、無論お師匠様が御存命であるならば、此度の敵討に就ては
 飽まで平太郎殿にお骨折をあそばすでもござらうが、何分故人
 になれりなされた方であるから、最早やその儀は相叶はぬ、よ
 つてお師匠様になり代り、この荒木も共に現場へ立よつて、切

野平太郎

めてのことに幾分のお力添へを仕らう」といはれて平太郎、誠之丞の兩人は天へも昇る心持をいたし平太「さては今わが日本六
 十餘州に隠れなき御高名の荒木御先生がわれに御助勢を下
 さるか、ヤレ忝ない、こんな結構なことはございませぬ、何分
 宜しくお願ひ申しあげます」と共に大喜びました、そこで
 翌朝は荒木もこれなる一行に加はることに相成りました、無事
 に一同彦根へさして立歸りましてございます、斯くて平太郎は
 義の叔父井上織部の屋敷へ落着きまして、精しく右の物語を致
 しました、スルと織部並に叔母のお千代もこの上の悦びはござ
 いますね、織部ア、平太郎よ、能くもそれだけ立派な腕前になつ
 てくれた、これとても南條氏のお蔭である、一ツにはまた死行
 かれたる其方の父が蔭身に附添ふて護られたからであらう、ア
 、芽出度い、それに就てその敵をばつれ歸り、この彦根で
 うたれし父の無念を彦根で晴らすといふのは何よりも結構ぢや

野平太郎

實に何うも之れに過ぎたことはない……之れは、荒木先生態々平太郎についておいで下されし段有難う存じ奉ります、何う
 か拙者と共に一應主公へお目通りをいたして下さるやう」と、
 茲に井上織部は荒木又右衛門、南條誠之丞並に平太郎の三人を
 引伴れまして、井伊掃部頭直孝公のお目通りをいたし、委細の
 話を言上に及びますると、主公も大層お悦びに相成りました、
 直孝ム、さうか、みな御苦勞ぢや、それでは苦しい、その
 龜澤兵庫之助をば毎日やうに苦しめて置いては身體に弱りがで
 る、さて弱りのでたときには充分の抵抗も出来まい、それでは
 平太郎が目覚ましき敵討をするに充分の抵抗も出来まい、それでは
 力のつく物でもたべさせ、その身體を壯健にさせておくがよい
 その上敵討勝負をすれば、うつ方でも力がいつて面白からう」
 と、主公は活潑なお方でござりますから、大層何うも勢のよい
 ことを仰せになりました、此方の面々はさても勇壯活潑な主公

にましますと、心の中で感心をして居りました、井上織部も悦びまして、織部有難う存じ奉ります、それに就きまして、いよいよ敵討の當日には城下外れの土地を御貸し下さいまするやう、尙ほまた切めて御前様の御名代なりともお立て下さいまして、何卒御上覧を願ひたうございます直孝、イヤ、名代ではないぞよ、手がその現場へ出張いたすによつて、手の眼前にて敵をうたせるがよい、兎に角充分に龜澤の身体をば壯健にして、おいてやれ織部ハ、ツ……」と井上織部は有難涙にくれてをります、このとき荒木又右衛門は井伊掃部頭様に初めてのお目通りを戴きます、蘆野平太郎、南條誠之丞とともその通り、殿様より厚きお言葉を戴きまして、共にお目通りを退りました、斯くて一同は井上の屋敷に泊つてをります、ところが茲に南條誠之丞より一通の手紙を認めまして關口先生の許へ、此度いよく

蘆野平太郎が敵をうつに至りましたまでの顛末をしらせること致しました、その手紙が紀伊國名草郡知歌山の城下、籠屋町に道場を開きました關口八郎の許へ到着致しますと、八郎はその手紙をよんでみまして、心の中の悦びは如何ばかり八郎ア、こりやア何うも美事な敵討である、それでは拙者もその場へ罷りこしてその敵討の見物をいたさうと思ひたちましたから、早速紀伊大納言頼宣公のお目通りを致しまして八郎御前様、此度江州彦根からかういふ手紙が参りましてございます、依つて私は彦根へ出張りましてその敵討を見届けたいと存じます、何卒暫くのお暇を願ひたい、といへば紀伊公も大いにお悦びになりまして頼宣それは結構々々、其方の屋敷に控へてをつた彼幼年なる平太郎といへる者が、此度敵をうつと申すか、實に芽出度いことである、予もその場へでばり、その敵討を見物いたしたいが、残念にもゆくことは出来な、よつて予の名代を一

人其方と共に彦根へ遣はすであらう」と仰せに相成りまして、久納丹波守といふ御家老にその役目を吩咐されました、これによつて久納丹波守は早速供揃ひに及び、二百五十人の同勢を従へ、關口八郎と共に和歌山を出立いたし、道中無事に江州彦根へ参り、これまた井上織部の屋敷を宿と致しました、尤も井上方は廣い屋敷であります、何うも二百五十人からの人が泊りこみますると、どの室もこの室も、寝るときには寢床で一ぱいでございます、然るに關口八郎が井上の屋敷へつきまするなり蘆野平太郎は南條誠之丞と共に、早速久方振りの目通りをいたし、涙にくれました、いろいろ其後の話を致しました、關口はこれをきいて大いに悦びながら八郎ア、平太郎、よくも通れの腕前になつてくれた、美事々々、遣り損ひのないやう、その敵をば一寸刻み五分試しにしてやるがよいぞよ平太承知を仕りましてございます八郎併ながら南條、これに就ては其方が平太郎

に附添ひ、飽までも力をいれるといふことになつたのは、全く名古屋の宇津木内藏之助が拙者の許へきて蘆野の話をしたからである、してみるとこのことをば名古屋へ知らしてやれば、宇津木も定めて悦ぶことであらう、都合によればまた彦根へ出てくるかもしれぬ、まだ敵討までには日もあることだから、兎に角拙者から宇津木の許へ使をたて、は何うであらう賊之イヤ先生、それは好いことでござります、早速お知らせ下さいますやう八郎それでは成るべく、宇津木もよびよせることにいたさうと、これより關口八郎が手紙を以て名古屋の宇津木の方へこれをしらせることに致しました、此方は宇津木内藏之助が使の者よりその手紙を受取りまして、これを開いてみますると、斯様々々の譯にて此度蘆野平太郎が彦根の御主公のお目通りに晴の仇討勝負をいたす、これに就ては仙臺より片倉小十郎殿の名代、紀州よりは紀州大納言頼宣公の御名代、尙ほまた柳生

十兵衛三藏先生の門人荒木又右衛門殿まで、みな立會に及ばれ
 るから、其許もどうか彦根へきて貰ひたいといふ書面でありま
 す、内藏之助は大きに悦びまして、早速その手紙を携へて城内
 へ登り義直公のお目通りを致しまして内藏御前様、斯様々に
 ございます、何うぞ暫くの間お暇を願ひます」といへば、こ
 の主公も大層活潑にあらせられますから義直ア、さうか、それ
 は愉快なことにちや、敵討とは面白い、然らば予もゆきたいが、
 残念ながら行くことは罷りならぬ、依つて予の名代を遣はす
 であらう、其方も同道をして参るがよい内藏有難きお言葉にござ
 います」これに依つて尾州の家老の中で竹越山城守といふ方が
 御主公の御名代となり、三百人の供を引率しまして、江州彦根
 へさして出立することになります、その中に宇津木内藏之助が
 加はつて彦根へ到着いたし、井上の屋敷へ落着きました、サア
 斯うなると變る所もございませぬ、左右の隣屋敷または三軒目

に至りまするまでも、みなこれを宿に借りうけることに相成り
 まして、建並んでをりまする五軒の屋敷はみな尾州家と紀伊家
 並に片倉小十郎殿の家來六百名ばかりといふものが、ズツと泊
 りこみましましたので、その混雑は一方なりませぬ、斯くて一同敵
 討の當日をまちうけることに相成りました、宇津木内藏之助も
 久方より平太郎にあひましたので内藏ア、平太郎、よくもそ
 れだけの達人になつた、芽出度いく、此度は親の敵をば尋常
 にうつとのことであるが、イヤ、誠に何うも拙者も悦ばしいわ
 い、拙者は其方の母をば宇都谷峠で以て助たこともあり、また
 其方には關口殿の屋敷で出合つたこともあるとしてみれば、こ
 れも何かの因縁づくであらう、拙者も共にその仇打勝負を見物
 仕るから、人に笑はれるやうな方方をいたすなよ、末世に立
 派な名の残るやうな勝負をしてくれ平太ハ、有難うござりま
 す」と、茲に彦根、紀州、尾州、伊達其他勇士

豪傑の後援を得まして、天にも昇る心地をいたし、たのれ今に敵打の當日がきたならば、假令敵が如何なる天魔鬼神であらうとも、たい一撃にうちとつてくれんと、勇氣凛々と致しましてその日の来るを待ちうけてをりましたことにごさいます。

第十席

そのうちに頃は慶安四年四月二十二日を以て敵討の當日と定められ、前以て城下外れ及び領分の境界々々にその建札をだされました、斯うなりますると諸國の浪人共はこれを聞き、彦根へ出てきて宿屋々々へ泊りこみ、何れもその日を待ちうけまする尚ほまた城下並に近郷近在は更なり、隣國の町民百姓に至るまで、此度の喧しい敵討、これは是非ともみてたかなければならぬといふので、みなゾロゾロと一日二日前に彦根へ到着いたし宿屋々々に泊りまして、密ると觸ると敵討の噂とりくにごさ

います、されば此度の敵討のために城下の宿屋々々は大繁昌を極めてをります、殊にその入りこみました大勢の人々が、チヨイく物々をくひ、或は物の一ツも買ふといふやうな譯で、城下へさして餘程の金子がおちるといふの有様にごさいます、さて敵討の場所彦根より八丁隔りました野の真中にて、外の矢來が二丁に四丁、その真中にまた二間に四間の土壇を築き、東の方と西の方とに木戸がございまして、北の方には南向にズイと棧敷が掛りました、その正面は井伊掃部頭直孝公のお控へになる御場所、その双方の棧敷は紀伊家、尾張家並に奥州片倉小十郎殿の御名代が控へになる場所にごさいます、それからズイと退つて一段低くできてあります長やかなる棧敷、これを井伊家の家來の方々が一同控へる所になつてをります、周圍の矢來の外は數多の町人百姓が集りまして、自由に見物を致します、尚ほまた二間に四間、二丁に四丁といふのは、これ全く

人たるものは初め二寸に四寸の處より生れまして、終は二尺と四尺の穴に納まりまするものにございませう、而もその人間の死したるときには西の國に極樂がある、その方へ參るといふことを申しますから、全くそのにしを象りまして二丁に四丁の矢來を結び廻し、またその中に二間と四間の土壇を築いたのでございませう、尤もその土壇と雖も、下の方はブツと廣く土を以て三尺、その上へ砂を以て三尺、合せて六尺の高さの土壇でございませう、更にその上の平な所が二間と四間でございまして、ズツと下の方では廣がつてをりまするから、その臺は餘程多きなものでございませう、棧敷の一方には太鼓が掛つてございまして、初めてドーンとうつのは進め太鼓、それにつれて互ひに土壇の真中へ進み、敵をうつ者と、うたれる者とが真劍の勝負に及びまする、このとき万一つべき者が敵のため反討にでも出會ひさうであつたらば、ドーンとまたもや太鼓をいれます、これ

が所謂暫し休めといふの合圖にございませう、さればうつべき者が斬りこんで行つて、もう今に敵をうつといふときは、決して休めといふ太鼓をいれませぬ、無論初めうつべき者には一杯の水をのませますが、うたれる奴には一口の水ものませませぬ、成るべく御上においてはうつべき者にうたせるやうにといふのお計ひにございませう、斯くて何彼の準備が充分に出來上りました、されば矢來の外に集りました老若男女の人々は、宛然黒山をなすがごとく光景にて、哩々と騒ぎたてゝをりまする、その聲は丸で耳を聳せんばかり、實に幾万人の人が寄つたとも知れない、實に錐をたてる餘地もないほどにギツシリと詰つてをりまする、棧敷の方には水色縮緬にて白く水に鬼の紋をそめ抜きました、幔幕をはり廻し、その正面にお控へになつてをりまするのは、これぞ三十六万石佐和山の御城主井伊掃部頭直孝公、續いて重だつた御家來衆がみなお控へにございませう、双方の棧

敷には紀伊家の御名代久納丹波守殿、尾張家の御名代竹越山城守殿並に奥州片倉小十郎殿の名代上田勇、上村左京、中島善四郎の三名、並にこれに附添の面々が控へられました。次に彦根の家來一同の方々が綺羅星のごとく、一段低つた棧敷へズツと列席に及んでをります。ところか井上織部の屋敷に打揃うてをります。すの、蘆野平太郎、南條誠之丞、その他勇士豪傑にございます。今しも時刻が近づきましたので、もうソロ／＼出掛けなければ相成らぬと、平太郎は白の衣服に白の袴、白の帯、これに白の後鉢巻を引締めまして、衣服の裾を甲斐々々しく取あげ、一刀を引抜いて目釘の裏と表を捻へ、ビューツ／＼とこれを振つてみます。な、何うしてその中味は飛ぶやうな氣遣ひもない、これならば大丈夫と、その抜刀の一刀を横手の方におきます。南條誠之丞も共に一刀の検査をして、風体を改め、これまた白装束にて白袴の一刀を抜刀のまゝ、ビタリと横

手におき、兩名揃つて並びました。ところへ井上織部が三寶に御神酒をのせまして、魚は塩鯛をつけ、これを兩人の前へもつて参りました。織部サア兩名の者、敵討の門出の祝ぢや、御神酒を一献づゝ……兩人「ハイ……」と、誠之丞、平太郎の兩人は件の塩鯛をとり、前においた抜刀の一刀を以て、その頭をばパツと斬り落します。これは前以て延喜を祝ふのでございます。何故斯ういふときに鯛を用ゐるかといふと、敵をばいましてしまふといふことださうで、九で語呂合のやうでございませうが、詰り敵の首は眞このこととはねたる体裁をいたし、次にグイと一口御神酒のみ了りました。平太郎は叔父上様、何うぞ貴方も現場へお出張り下されて、敵討勝負を御見物を願ひます。織部ム、平太郎、遣り損ふなよ平太郎、大丈夫でございませう。織部ア、よし／＼……南條殿、御身は若しもこれなる平太郎が反打になつたそのときには、直ぐに平太郎になり代つて、敵討

蘆野平太郎

をして貰はなければならぬ、何うぞ宜しく願ひたい誠之承知を
 致しました織部「サア、何誰も勇士豪傑の方々、現場へ参ること
 に致しませう」と、先づ井上織部は平太郎と誠之丞とをつれて
 戸外へ立いでます、その後より續いて参りますのは關口八郎
 宇津木内藏之助、荒木又右衛門の三名にございます、尤も荒木
 は關口、宇津木とは豫て懸意の間柄でございますから、互ひに
 雑談をしながらブラ／＼と歩つて参ります、その後からは井上
 の家内の者一同が續きました、ドン／＼敵討の現場をさして進
 んで参ります、話頭一轉、茲に敵龜澤兵庫之助をば一時預り
 まして、その日の来るまで入牢を申しつけ、主公の仰せにより
 食物はなるべく滋養物ばかりを施行ひ、嚴重にこれを警めてを
 りましたのは町奉行の船井久馬といへる人でございます、その
 船井久馬が今日しも牢内より龜澤を引出だしまして、充分繩を
 かけ、下役の者に取まかせ、その身は傍に附添ひ、懸て現場を

蘆野平太郎

さして出て参り、東の方より西に向つて木戸口をはいります、
 蘆野平太郎の方は西の方より東に向つて木戸口をはいります
 何故敵の方が東から西に向つて入りこむかといふと、詰り西は
 西方極樂世界としてございまして、全く死にゆくといふ處から
 西即ち陰の方に向つて進ませるのでございます、蘆野平太郎の
 方は東即ち陽に向つて進み、ドン／＼中へ入りこみましたが、
 互ひに控所といふものがある、尤も敵龜澤兵庫之助も同じく白
 装束にて一刀を携へ、ビニ／＼と空をきつて腕調べをいた
 し、充分に腕を固めまして兵庫ウヌ、覺えてをれい、何うせこ
 の真中にて拙者の助かる道理はない、なれども彼を反討にいた
 した上、他の者の手に掛つて最期をどげやう」といふの考でこ
 ざいました、暫くの間太鼓の鳴るをまつてをりましたが、懸て
 一番の太鼓がドンと鳴り始めますと、兩方から蘆野平太郎
 と龜澤兵庫之助とがズイと土壇の真中をさして登りました、こ

れをみた見物人は思はずワーツと騒ぎだし、なか／＼何うして互ひに言葉をかけても聞かぬ譯のものではない、平太郎はそれへ進みながら平太郎、それなる處の龜澤兵庫之助、われは野多門忠近の遺子平太郎であるが、七歳のときに家出をしたその後で、汝は我父をうつて國元をたちのいた趣、憎んでも憐れぬ振舞である、依つてわが母が其方の所在を捜べやうと諸國を遍廻りたる、その艱難辛苦の程は數もしれぬ、然るに仙臺において我母は汝の姿を見付け伊達公の御行列の間へまりこんで、遂には斬死をいたしたやうな次第である、恨の重なる龜澤兵庫之助、いま此場で以てこれなる十七歳の蘆野平太郎が首尾よく父母の無念を晴し、汝の身を八裂きにしてやるから、左様心得よ、といへば龜澤兵庫之助は大膽不敵の曲者、何々と打笑ひまして兵庫、ア、猪牙才千萬なるその一言、ウヌ小僧の分際として敵討などいは何たる白痴けたことを申すか、飛んで火にいる

夏の虫、好き好んで反討になりたうて手出をいたすとはいはうやうなき馬鹿男、サアうたれるものならうつて見よ、ハ、ハ、平太郎のれ龜澤、何をいらぬことを饒舌りたつるか、不埒千萬なる其方、いま此場において美事にうたぬでたくべきか、サア覺悟をせよツ」と言ふより早く平太郎は白鞘の一刀をとり、サアツと言つて身構へに及びました、何しろ關口流の極意に達してをる蘆野平太郎の腕前でありました、何しろ關口流の極意に達して眼と眼との間より、丁度敵龜澤の眼と眼との間へさしてグツと斯うきたかと思ふと、なか／＼もう龜澤はドリ、とも動けませぬ、龜澤は一刀を大上段に振り冠り、兵庫、ア、何うも此奴の太刀尖は恐ろしいものだ、これは油斷がならない予よ」と、暫くの問沈と腕んでをりましたが、斯くては果てしとを氣を取直しヤツといふ一聲諸共に平太郎を望んで打ち下さんとする、このとき横手の方へ廻りまして、敵の龜澤も適れな腕前の奴であるか

蘆野平太郎

ら、万一平太郎の危くなつたそのときには手をいだし、これを
 助けてやらうと、一刀をさげたまふ、沈と互ひに斬りこむ切尖
 に眼をつけてをりました三人は、これ即ち荒木、鬮口、宇津木
 の三豪傑にございます三人「ヤア、ソレ其所ぢや、斬りこめい、
 アツ、危い、そこだく」と、三人が交るく、言葉の助太刀
 なかく、外の者がこんなことを饒舌りますると、敵をうつ者の
 ためには邪魔になつて仕様がありませんが、これだけの大先生
 がいはれることいふものは、なか／＼何うして一言も役にあ
 はぬ言葉はございません、平太郎がヤツといつて斬りこまうと
 するとき「〇ヤア、其所だ」といふ聲が掛りますと、その斬
 りこむ力が、十のものなら二十になり、二十のものなら五十に
 もなるといふやうな譯でございまして、だん／＼に勢がまして
 参ります、之れに反して龜澤は死物狂ひとなり、ヤツといふ聲
 諸共に平太郎の肩口を望んで斬り下して参りました、それとみ

蘆野平太郎

た平太郎は隙さすバツとその體を引外しますると、流石は年を
 老りました龜澤兵庫之助、さてはスカを喰つたか、サア失敗つ
 たと、おのれまた後へ寄つて身構へに及ぶといふのではござい
 ません、スカを喰ふなりヒヨロ／＼と踏跟きつ、平太郎の方へ
 近寄つた途端に颯と太刀の尖をば轉じまして、平太郎の横ッ腹
 をばバツと横拂ひに斬りこみました、平太郎は一度體を轉した
 から、續いて横腹をさられるやうなことはなからうと思つて居
 りましたが、隙さすバツと斬りこんできたものだから、既に危
 く斬られんとする一刹那、傍らに突つたつてをる南條誠之丞、
 危いッと思つたものですから、バツと龜澤の手許へさして飛び
 込むが早い、刀背打で以て龜澤の腕首をばビユ一ツと一ッ叩
 きました、スルと龜澤はバツと手に痺がきて、思はずヒヨロヒ
 ヨロと一方へ踏跟いた途端に、土壇の上から仰向にコロ／＼と
 轉りおちた、これを眺めた平太郎は隙さす土壇を走つて下るが

早いか、ザク！と龜澤を目掛けて斬りこまうとする、このとき荒木又右衛門は聲をあげまして「又右卑怯だッ」と一聲呼ばりました、平太郎はいま斬り下さうとしたその手を偶爾止めまして、ハッと荒木の方へ顔を向けますると又右平太郎、それは卑怯である、あれなる土壇の上に戻り、尋常に勝負をいたせ平太ハイ……」といひながら、平太郎は土壇の上へさして歸つてくると、そのとき下役の方が早速水をもつて参りまして、龜澤の口へいれてやると、龜澤はこれをのんでホッと息をつく、そこで下役の方が龜澤を引起しまして役人「サア、土壇へ登れい」といふので、またもや以前の處へ引張りあげますると、龜澤は口へ砂がはいりましたので、フウ〜とこれを吹きだしながら兵庫この小僧は餘程の腕前であるわい、イヤ何うも親よりはなかなか何うも此奴の方が上手だぞ、油断はならぬ」と思ひながら、此度は狂人のやうに相成りまして、もう流儀も何もございませ

ぬ、無暗にドン〜斬りこんできた、平太郎はこれを眺めまして平太此奴は何といふ斬りこみ方をするのだらう」と、バ、バ、ツと彼方此方へ體を轉してをりましたが、到頭平太郎がヤツといふ一聲諸共に敵の手許へさして飛びこんでくるなり、バツと斬り下さうとしたときに、關口八郎が一方よりヤツと氣合をかけました、斯ういふ豪傑が氣合をかけますると、一寸ばかりしか這入らぬ太刀でも、二寸も深くはいると申します、その氣合の助太刀をうけまして、今しも平太郎がザク！と斬り下しますると、龜澤は肩口へ一寸五分ばかり斬りつけられたから堪らない、ドタ〜と仰向に轉覆りました、このとき宇津木内藏之助は立ち上り内藏「ヤア平太郎、待てッ」といふ言葉に、またもや平太郎が踏止まりますると、先刻より沈々とした勝負をみてをりました南條誠之丞が、ツカ〜と引起しました、スルと龜澤はも

う死物狂ひになつてをりますから、南條を望んで颯と横拂ひに
 拂ひます、このとき南條はバツと上の上へとび上つたから、到
 頭その刃は誠之丞の足の下をばとんで抜けました、地上に突ッ
 立つた南條誠之丞は誠之「ヤア、此奴め拙者へ斬りこむとは憎む
 べき奴だ、蘆野が一の太刀をいれてをるのだから、二の太刀は
 拙者がいれても苦しくなからう、イヤ、此奴はひどい奴だわい
 と、またもや龜澤を引起して、一寸と腰の邊をつきますると、
 龜澤はヒヨロ／＼と平太郎の許へ踏跟いて参ります、南條は
 この上餘り深く斬りこんで殺してしまつては相成らぬと、龜澤は
 の肩口を望みまして、ヤツといふ聲をかけながら、此度は一寸
 ばかりの深さに斬りつけました、龜澤は左右の肩に傷をおはさ
 れたから、もう兩眼がグラ／＼と眩んで参りまして、何うにも
 斯うにも働くことができない、其所へドカリとへたつてしまひ
 まして、たゞもう無暗に刀を振り廻すばかりにございませう、と

ころへバツ／＼とかけつけて参りましたのは、これを家來の善
 助でございまして善助「ヤア若旦那様、それは餘りお情ないでは
 ござりませぬか、何故私にこの場へお供を許して下さいますか
 何うぞ私にも切めてのこと、一太刀お許しを願ひます」と、そ
 れなる土壇へかけ登つて参りました、南條はこれを聴きまして
 誠之「イヤ善助、これは拙者が悪かつた、平太郎はその氣がつか
 ないでも、拙者が其方に供を許さなければならなかつたわい、
 サア、初太刀は平太郎、二の太刀は拙者がいれたから、其方は
 三の太刀をいれるがよい善助「ハイ、有難うございませう」といひ
 ながら、善助は何だか狼狽へたやうな様子でございませうから、
 誠之「コレ／＼善助、何うしたのちや善助「へい、刀をば持つてく
 るのを忘れしました誠之「それは餘り輕卒ではないか、サアこれを
 貸してやるから、これで一太刀の恨を晴すがよい善助「有難う存
 じます」と、善助はその一刀を借りうけまして善助「サア、こ

の龜澤奴、よくも汝は本日までわれ／＼主従を苦しめやアがつた、假令産野の旦那様が汝のためにならぬとて、汝は今まで生かしておくべき奴ではない、よくもおれが汝の娘と一緒になつたからといつて、汝はおれをば酷く責めやアがつた、以前はといへば汝の娘が惚れておれをよび寄せたのぢやないか、それがためにおれが忍んで行つてやつたのぢや、それに汝はおれを盗人と吐した、憎い奴だ、汝の娘の悪いことを棚にあげておいて、この色男をば酷い目にあはせるとは……」といひに掛らうとするから、南條が之れを押止めまして誠之「コリヤ／＼善助、敵討の場所、女に惚れられた惚氣をいふ奴があるか、早くされ／＼、善助へい、誠に何うも恐入りました、コリヤ、おのれ斯うしてやらう」と、善助は龜澤の身體へザク／＼と斬りこむのならば宜いのでございますが、さうではない、その刀をばグイと脊にあてまして、グイ／＼とひいたり、突いたりするものだ

から、衣類はさされる、脊の皮膚はさされる、その上刀がグツと肉へくひ込むのだから、なか／＼堪つたものではない、龜澤はウツと手足を藻掻くばかり、善助はその苦しんでをります、龜澤の足を持つてポーンと向ふへ蹴飛ばしますと、また彼方へドーンと横に打ッ倒れます、その上に乗り掛つた善助が、此度はまたもや刀の切尖を以て、額から額の薄皮を一文字にひいたので、深さは一分か二分、長さは四五寸の傷がついた、龜澤は弄殺にせられて、死ぬにもしなれず、宛然七轉八倒の苦しみにございます、荒木、關口、宇津木の三名は大笑に及びまして三人「之れは何うも面白い斬討もあればあるものぢや、コレ／＼善助、もう一度龜澤を引起してやれい」といふので、善助はまたもやグイと龜澤を引起し、これを起たしてみますと、身體はもう血塗れになり、そのまゝ、倒れます、このとき南條は傍に落ちてある龜澤の刀を拾ひとり、これを本人に持たし

に掛りますると、龜澤も一生懸命の場合、その刀を持つが早い
 か、盲滅法に眼の前に突つたつてをる平太郎を目掛けて斬りこ
 みます、平太郎も笑ひながら平太郎まだ汝、死暴れに暴れるか
 と、早くも一足踏こんで参りました平太郎殿様を初め、尾州、
 紀州並に仙臺の御名代の方々、これを御覽下され」と、その棧
 敷の方へ向つて黙禮をしながら、ブーツと横拂ひに拂ひます
 と、龜澤の首はコロリとその場へおちてしまひました、スルと
 御主公を初め三家の御名代並に家中一同の者は何れもその場に
 立ち上り一回ヤア、適れであるぞ、芽出度い」と大聲をあ
 げて賞められます、矢來の外の人々もそれとみるより、一同
 聲をあびまして一回ヤア、蘆野平太郎様が美事に敵をうたれた
 われ、胸がスウーとしたわい、丁度大根おろしで飯をぐつ
 たやうに、胸が開いたやうな気がするわい、ヤア芽出度い芽
 出度い」と、もう何万といふ人が異口同音に騒ぎたてますそ

の聲は暫し鳴りもやみませなんだ、殊に平太郎の義理の叔父井
 上織部、叔母のお千代は現在甥の平太郎が斯る譽の大仇討を
 げたことでありますから、餘りの嬉しさに何の言葉もなく、感
 極まつて涙を流してをります、そこで蘆野平太郎は首尾よく敵
 をうちとりましたから、井伊掃部頭直孝公並に三家の御名代の
 前に進みまして、厚く御禮を申しあげます、これによつて紀
 州、尾州の両家の御名代は、井伊家より町奉行なる待遇をうけら
 れまして、それ、本國へさして引返すことに相成ります、尙
 ほまた仙臺片倉殿の御名代として居りました、三名も、同
 じく井伊家より御苦勞とあつて町奉行にお款待になり、遂に三名
 は殿様を初め關口、荒木、宇津木の三豪傑並に南條、蘆野等に
 別をつげ、本國奥州へ立歸り主君片倉小十郎殿へ敵討の顛末を
 透一お話をいたされたことにございます、次に關口八郎、荒木
 又右衛門、宇津木内藏之助の三豪傑は井上織部の屋敷へ引とり

まして、織部夫婦並に平太郎、誠之丞等と共に祝の酒宴を開きまして、翌日それ／＼本國へさして引取りまする、ところが蘆野平太郎は殿様より父多門忠近の戴いてをりました祿高、それを半地ではなく、三千石そのまゝお下附しおかれ、芽出度く蘆野の家を相続することに相成りましたが、併し何分まだ十七歳の若年者でござりまするから、後日女房を迎へ、屋敷の納まるまでは、南條誠之丞が後見といふことに相成りまして、そのまゝ誠之丞は蘆野の屋敷へ足を留めることに致しまして、斯くて蘆野平太郎は多年の本懐を遂げたことでありましたから、この上の悦びはございませぬ、之れ全く殿様を初め、その他の方々をお蔭である、大きに悦びまして、懇ろに亡き父母の佛事供養を營み、その冥福を祈り、なほ自分は一生命に武術の修業を勵み、殿様に忠勤を盡してをりましたが、遂に二十一歳の春殿様のお媒介によりまして、同藩より妻を娶り、立派なる三千

石の武士と相成り、主公の御指南番を仰せつけられました、尙ほまた善助は蘆野家の若黨となり、女房を控へまして、一生當屋敷で忠義を盡すことになりましたので、南條誠之丞も大きに安心を致しまして、遂に暇をつげ、之れは一先づ紀州表へ立歸りましたことございませぬ、さて蘆根にて騒動を惹起しました悪人龜澤兵庫之助も、到頭また蘆根の土地において孝子平太郎のためになりとられ、善人榮ね、悪人亡びまして、茲に首尾よく鎮まることになりましたので、これほど芽出度いことはいませぬ、これにてなが／＼伺ひました蘆根騒動、勇婦お政並に蘆野平太郎のお話も大團圓をつけましてございませぬ、御退屈さませ……。

蘆根 蘆野平太郎 (大團圓)

積善館本店發行小冊目錄

口一橋 演山川	肥速耶太由藤加演講林伯舍名揚										
時敵 荒木又右衛門	時敵 大高源吾	時敵 赤垣源藏	時敵 佐々木四郎高綱	時敵 水戸三勇士	時敵 笹野權三郎	時敵 尼子拾勇士	時敵 佐野鹿十郎	時敵 田宮坊太郎	時敵 岩見重太郎	時敵 宮本武藏傳	時敵 笑となみだ
演口龍伯田神 記速耶次平山九	石原水全	加牛全	加牛全	加牛全	加牛全	加牛全	加牛全	加牛全	加牛全	加牛全	加牛全
時敵 業平金次	時敵 村正勘次	時敵 大和龍子	時敵 講談想夫戀	時敵 寶藏院名槍傳	時敵 佐野次郎左衛門	時敵 細川十傑傳	時敵 松永三勇士	時敵 眞田幸村傳	時敵 眞田幸村傳	時敵 眞田幸村傳	時敵 眞田幸村傳
記速耶次平山九演講口一川石										家持 速勝	
時敵 銘刃米一丸	時敵 錨綱長吉	時敵 肥後の仇討	時敵 岩井善右衛門	時敵 武内熊之助	時敵 石原平四郎	時敵 犬塚富藏	時敵 講談四千兩	時敵 辨天娘	時敵 笑となみだ	時敵 笑となみだ	時敵 笑となみだ
錢四金 冊一稅郵 錢拾貳金價定 製並上以											

明治四十三年十二月廿五日印刷
明治四十三年十二月三十日發行

芦野平太郎

講演者 京山恭高

發行者 大阪市東區安土町四丁目三十八番屋敷 石田忠兵衛

印刷者 大阪市西區立賣堀南通二丁目二二五番邸 宮野孝恩



發行所 大阪府東區安土町四丁目 積善館本店

發賣所 大阪府東區南渡邊町 彰文館書店

電話東一三〇番 電話東三五〇七番

積善館本店發行小行說目錄

揚名舍伯林講演加藤由太郎速肥									
時歌	時歌	時歌	時歌	時歌	時歌	時歌	時歌	時歌	時歌
岩見重太郎	田宮坊太郎	佐野鹿十郎	尼子拾勇士	笹野權三郎	水戸三勇士	近江 佐々木四郎高綱	赤穂 赤垣源藏	赤穂 大高原吾	時歌 荒木又右衛門
加藤由太郎	赤穂 大高原吾	赤穂 赤垣源藏	近江 佐々木四郎高綱	時歌 水戸三勇士	時歌 笹野權三郎	時歌 尼子拾勇士	時歌 佐野鹿十郎	時歌 田宮坊太郎	時歌 岩見重太郎
加藤由太郎	赤穂 大高原吾	赤穂 赤垣源藏	近江 佐々木四郎高綱	時歌 水戸三勇士	時歌 笹野權三郎	時歌 尼子拾勇士	時歌 佐野鹿十郎	時歌 田宮坊太郎	時歌 岩見重太郎
宮本武藏傳	眞田幸村傳	松永三勇士	細川十傑傳	佐野次郎左衛門	寶藏院名槍傳	神九 講談想夫戀	伯平 大和龍子	龍次 村正勘次	口速 業平金次
宮本武藏傳	眞田幸村傳	松永三勇士	細川十傑傳	佐野次郎左衛門	寶藏院名槍傳	神九 講談想夫戀	伯平 大和龍子	龍次 村正勘次	口速 業平金次
宮本武藏傳	眞田幸村傳	松永三勇士	細川十傑傳	佐野次郎左衛門	寶藏院名槍傳	神九 講談想夫戀	伯平 大和龍子	龍次 村正勘次	口速 業平金次
石川一川	笑となみだ	辨天娘	講談四千兩	犬塚富藏	石原平四郎	武内熊之助	岩井善右衛門	肥後の仇討	錨綱長吉
石川一川	笑となみだ	辨天娘	講談四千兩	犬塚富藏	石原平四郎	武内熊之助	岩井善右衛門	肥後の仇討	錨綱長吉
石川一川	笑となみだ	辨天娘	講談四千兩	犬塚富藏	石原平四郎	武内熊之助	岩井善右衛門	肥後の仇討	錨綱長吉
銘刃米一丸	錨綱長吉	肥後の仇討	岩井善右衛門	武内熊之助	石原平四郎	犬塚富藏	講談四千兩	辨天娘	笑となみだ
銘刃米一丸	錨綱長吉	肥後の仇討	岩井善右衛門	武内熊之助	石原平四郎	犬塚富藏	講談四千兩	辨天娘	笑となみだ
銘刃米一丸	錨綱長吉	肥後の仇討	岩井善右衛門	武内熊之助	石原平四郎	犬塚富藏	講談四千兩	辨天娘	笑となみだ

以上並製 定價金貳拾錢 郵稅一冊 金四錢

明治四十三年十二月廿五日印刷
明治四十三年十二月三十日發行

芦野平太郎

講演者 京 山 恭 高

發行者 大阪市東區安土町四丁目三十八番屋敷 石 田 忠 兵 衛

印刷者 大阪市西區立賣堀南通二丁目二二五番邸 宮 野 孝 恩



發行所

大阪市東區安土町四丁目
振替口座大阪二九八二番

積善館本店

電話東一三〇番

發賣所

大阪市東區南渡邊町
振替口座大阪三五二番

彰文館書店

電話東三五〇七番

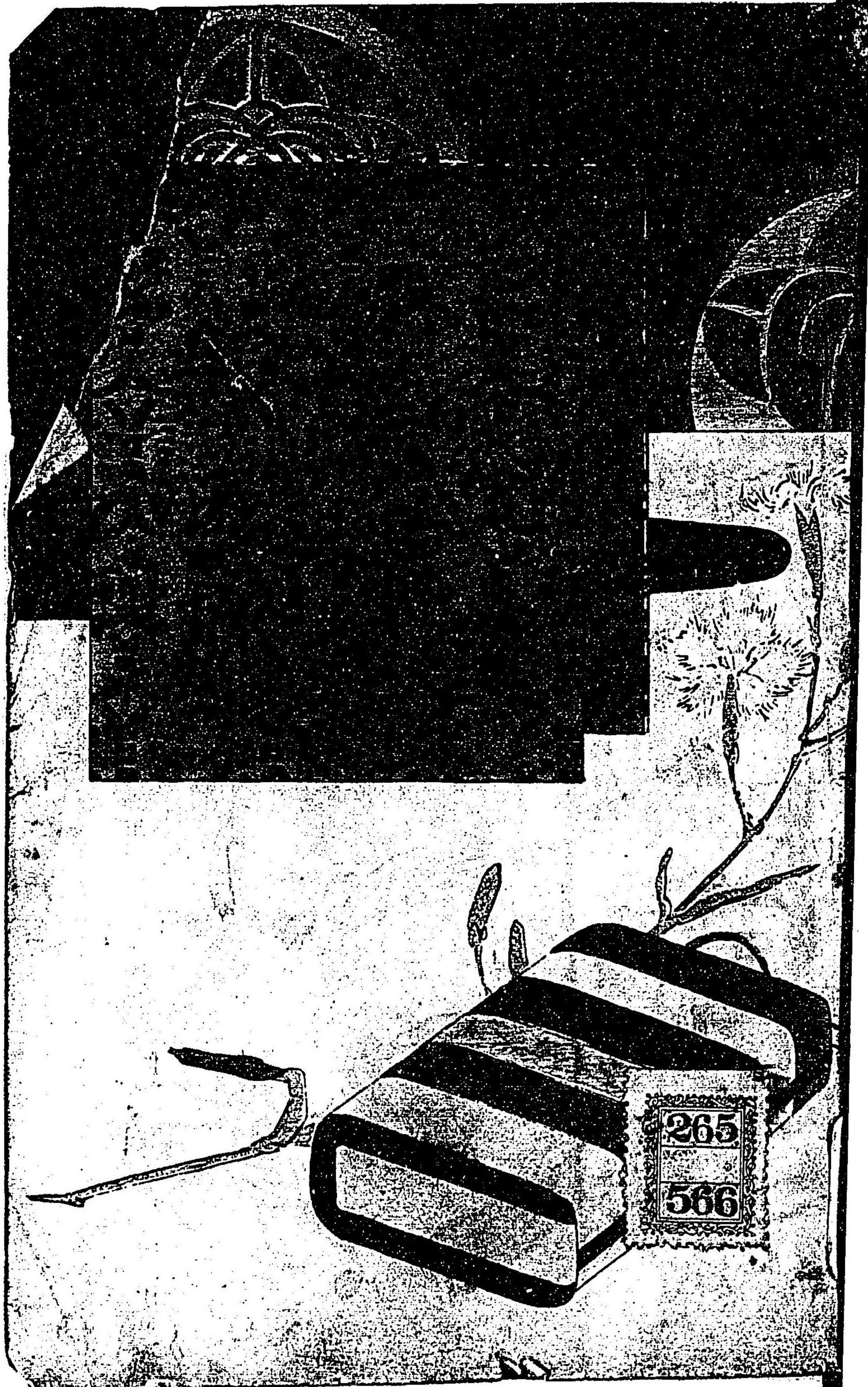
265
566

積善館本店發行小目録

記速那次平山丸 濱口龍伯田神					記速那次平山丸 濱口口一川石				
時鳥新藏	小島長門	大島平八郎	高萩伊之松	赤尾林藏	眞葛ヶ原仇討	黒船忠右衛門	幽靈の片袖	淀屋辰五郎	尾張傳内
記速夫唯田山 濱口齋秀五田五					記速那次平山丸 濱口龍伯田神				
藤堂家大評定	左文字雪江	鬼丸花太郎	立花彌五郎	駒形鐵五郎	柳澤雪江	松本春太郎	桂川力藏	齋藤大八	鬼勝丸
濱口高壽山京 記速那一部田山	濱口口一川石 記速津南口羅	濱口齋來廻玉 記速那三揚島	濱口國富澤廣 記速那一部田山	南小林 著	後同 綴上				
蘆野平太郎	勇婦お政	丸龜大仇討	尼崎りや女	辰の口大評定	筑紫の荒波	荒井お秀	佐藤勇婦傳	伊藤博文	阿漕廻旗風
錢四金 册一稅郵 錢五拾貳金價定 製上玉以									



積善餘
芬



098166-000-4

特9-704

蘆野平太郎(彦根騒動)

京山 恭高/講演

M43

DBU-0011

